

## 「社会で働く若者の苦悩についての考察」

ここ数年、社会に出て、働くことに苦戦している若者が増え続けているようだ。メディアでもしばしば特集が組まれるように、社会問題として深刻化している。この状況下で、自分を含めた 20 代が抱えている、社会に出て仕事をしていく上での苦悩や課題、それを解決する為の対策について考えてみた。

自分が子供の頃に考えていた「働く」ということは、「大人になったら誰でもする当たり前のこと」であり、最近の「働きたくても、働けない」世の中になるなんてことや、正規職に就けないフリーターと呼ばれる人がこれほどまで多く存在するようになるとは想像もつかなかった。

今回、このテーマについて考えるきっかけとなったのは、自分自身の大学卒業及び就職、そして退職、転職から、今日に至るまでを振り返ってみたからだ。私は卒業後、SE（システムエンジニア）の仕事に携わった。しかし、自分の勉強不足もあり、数か月で退職することとなり、その後、大学在学以来の就職活動を再開した。その間の半年余りを振り返ってみると、一日も早く再就職したいという一心で、手当たり次第に様々な職種に応募していた。しかし、業務上必要になる資格取得状況や経験を考慮すると、再就職は簡単なことではなかった。数十社エントリーしたが、書類選考の時点で不採用の通知が届き、筆記試験や面接に挑むことさえ出来ない時期が続いた。それまでの 20 数年の人生の中で、最も辛い時期だったことを今でも忘れられない。

その状況の中で、たまたま求人広告で昴の職員募集の告知が目にとまり応募したところ、採用が決まった。福祉に関する勉強も経験も全くないままにこの道に進む決心をしたのである。福祉の仕事に関しては、二人の祖母が長年、車いすを利用した生活を送っていたこともあり漠然とした興味はあった。しかし、ただそれだけのことで、この仕事に就く為に準備をしてきたわけではないままの就職だった。そして、昴に入職してからの 3 年を振り返ってみると、見るもの聞くもの全てが初めての経験ばかりで、常に悩み、模索する状態が続いていた。しかし、自分の関心がある職に就けたということは、これから長年「働く」ことを継続する上で自分にとって良い再スタートが切れたと思う。

今考えてみる、新しい仕事に向き合う準備が出来ていない自分が、前職とは畑違いの職に携わることが出来たのは、運が良かったといしか言いようがない。しかし、以前の私と同様に、働く意志を持って行動を起こしているにも関わらず、仕事に就けていないニート状態の若者も多い。そういう若者を「レイブル」と呼び、応援する機運を高めようとする試みが大阪で昨年（2012）1 月より進められているという。レイブルとは、「レイトブルーマー」という言葉の略で、「遅咲き」という意味である。比較的、マイナスイメージを与えるニートに代わる新たな呼称として発信し、就労を後押ししていく構えである。

一方、若者が仕事に対して、後ろ向きになる要因一つは、イージーミスを恐れることとも考えられている。しかし、そのことを今の自分に引き付けて考えると、失敗したことから得られるものが多く、そうした体験も大切なことのように思える。これを、今、自分が携わっている、「障害を持った方の生活を支えるということ」に置き換えて考えてみると、サービスを利用されている方に対する人としての尊厳の尊重と、命に関わること以外の失敗はたくさんしても良いと思う。もちろん、失敗はないほうが望ましいし、相手に不快な思いをさせないほうが良いに決まっているが、失敗は必ず今後の自分への糧となることを学んできた。成功から生まれるものより、失敗から生まれるものの方が、むしろ自分の力になり、その後の仕事の武器になると思う。

木藤 弘喜(デイセンター・ウイズ)